42679
教科書文庫
4
760
32-1935
20000
72711

3b
760
昭10

新訂

高等小學唱歌

第一學年　男子用

文部省

36
760
昭10

資料室

新訂

高等小學唱歌

第一學年　男子用

広島大学
教
72711
図書

文部省

緒　言

一、本書ハ、音樂教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ、高等小學校唱歌科ノ教科用トシテ、新ニ編纂セルモノナリ。

二、本書ハ、各學年ソレゾレ男子用ト女子用トニ分チテ編纂シ、何レモ毎卷二十二章トセリ。内、各十五章ハ、男子用・女子用共通ノ教材、他ノ各七章ハ、男子用・女子用ノ別ニ從ヒテ、歌詞・樂曲トモニ相異ナルモノヲ以テ充テタリ。

三、本書ノ歌詞及ビ樂曲ハ、歌詞ニ高等小學讀本・農村用高等小學讀本所載ノ韻文ノ一部（第一學年用「昭憲皇太后御歌」・第二學年用「夏の曉」・第三學年用「稻刈」）ヲ採用セル以外、總ベテ本省ノ新作ニ係ル。

四、本書ノ教材排列ハ、程度ノ難易ノミニヨラズ、一面、歌詞ニ示サレタル季節・行事ニ就キテモ考慮セリ。

五、本書ハ、取扱者ノ便宜ノタメ、唱歌曲ノミノ樂譜ヲ揭ゲタルモノト、伴奏附ノ樂譜ヲ揭ゲタルモノト、二種類作製セリ。但シ、後者ハ、男子用・女子用共通ノモノト男子用・女子用各別ノモノトヲ併セ揭ゲタルヲ以テ、各卷二十九章ヨリ成ル。

六、本書ノ樂曲ハ、事情ニヨリ、伴奏ヲ附セズシテ授クルモ差支ナシ。然レドモ、伴奏ヲ附スルコトニヨリテ、タダニ歌唱ニ便スルノミナラズ、ナホ歌曲ノ興趣ヲ增進セシムルコトヲ得ベシ。

七、唱歌曲ノミヲ掲ゲタルモノニ於テハ、伴奏ノ前奏・間奏・後奏ノ部分ニ對シテ、必要ナル休止符ヲ附シ、又ハ休止符ト併セテ當該箇所ノ伴奏ノ主要旋律ヲ記シ、以テ歌唱ニ便ナラシメタリ。

八、本書ノ唱歌曲中、重音ノ箇所ハ、事情ニヨリ、上部主要旋律ノミヲ採リ、單音唱歌トシテ課スルモ妨ゲナシ。其ノ際ニハ、正規ノ場合ト同一ノ伴奏ヲ附スルコトヲ得。

九、本書ノ樂譜ニ配當セル歌詞ノ記法ハ、概シテ新訂尋常小學唱歌ニ準ゼルモ、其ノ間、ナルベク發音上ノ實際ニ適切ナラシメンタメ、更ニ新ナル考慮ヲ加ヘタリ。

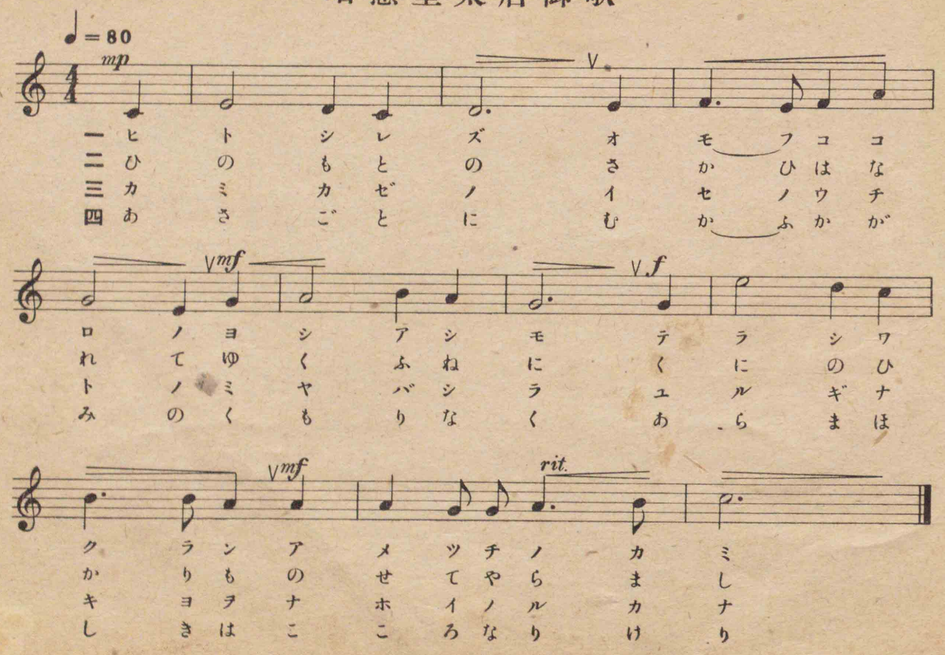
一〇、本書ノ樂曲ハ、概ネ中等諸學校ノ初年級並ビニ青年學校等ニ於テモ使用スルコトヲ得ベシ。

昭和十年三月　　文部省

目次

一　昭憲皇太后御歌……2
二　鯉幟……4
三　風薫る……8
四　野球の歌……10
五　希望……14
六　梅雨晴……18
七　太平洋……20
八　登山……24
九　海國男子……28
一〇　秋近し……32
一一　灯……34
一二　舟にのりて……36
一三　高嶺の月……40
一四　村時雨……42
一五　滿洲の野……44
一六　御代の榮（二部合唱）……48
一七　冬來る……50
一八　御裳濯川……52
一九　薩摩守……56
二〇　雪の行軍……58
二一　春の訪れ……62
二二　送別の歌（獨唱及び二部合唱）……64

昭憲皇太后御歌



一、昭憲皇太后御歌

一、人知れず思ふ心のよしあしも
　　照らし分くらん天地の神

二、日の本のさかひ離れてゆく船に
　　國の光も載せてやらまし

三、神風の伊勢の内外の宮柱
　　ゆるぎなき世をなほ祈るかな

四、朝毎にむかふ鏡のくもりなく
　　あらまほしきは心なりけり

鯉　幟

♩= 126

10

mf

一 ゴ グワツ ノ ソ ラ ハ ハ レ ワ タ リ
二 ち じやう ー の か げ の を ど る に も ク
三 ミ ヤ コ ニ ヒ ナ ニ ニ ホ ハ シ ろ を
四 ひ ご ひ は あ か く ま ご こ ろ を

mp

カ ゼ ノ カ ヲ レ バ ヤ グ ル マ ノ オ ト ー
ち か ら あ ふ れ て ひ も す が ら く ち ー
ア ヲ バ ワ カ バ ノ モ ユ ル ト キ ヲ ノ ー
ま ご ひ ま く ろ く け な げ さ を わ れ ー

モ ホ ガ ラ ー ニ ヒ ヲ
に ま な こ ー に モ ウ に マ
コ コ コ ニ ー て こ の
に し め し ー て こ の

mf　f

ア ー ビ テ に ー ヲ ヲ シ ク オ ヨ グ る
ひ ー れ ー ー い の ち の こ も タ ル
レ ー ヌ ー ー ホ コ ル ニ ニ タ ル
と ー し も ー の ぞ み に い さ む

コ ヒ ノ ボ リ リ ニ ツ ポ ン ダ ン ジ ノ
こ ひ の ぼ り り に つ ぽ ん だ ん じ の
コ ヒ ノ ボ リ リ ニ ツ ポ ン ダ ン ジ ノ
こ ひ の ぼ り り に つ ぽ ん だ ん じ は

イ キ ミ ー セ テ ー
す が た ー ー に シ て テ ー
カ ズ マ ー ー シ テ テ ー
か く あ ー ー れ テ と ー

二、鯉幟

一、
五月の空は晴れわたり、
風の薫れば、矢車の
音もほがらに、陽を浴びて
雄雄しく泳ぐ鯉幟。
日本男兒の意氣見せて。

二、
地上の影のをどるにも
力溢れて、ひもすがら、
口に、眼に、尾に、鰭に、
命のこもる鯉幟。
日本男兒の姿にて。

三、
都に、鄙に、匂はしく
青葉・若葉のもゆる時、
男の子ここにも生まれぬと、
ほこるに似たる鯉幟。
日本男兒の數增して。

四、
緋鯉はあかく、まごころを、
眞鯉まくろく、健げさを
我にしめして、この年も
望にいさむ鯉幟。
日本男兒はかくあれと。

風薫る

♩= 120

4

mp

一 トリノネシゲキヤマアヒノ
二 きばのひるのしづけきに
三 クハノハミテテカゴセオヒ

mf

アヲバワカバニヒノヒカリハ
むれをはなれしわかごりユク
イソギノミチヲカへリ

mp

ヲカノムギバタやトブテフ一ノ
ひばりきくとラめをとぎてノ
ウタモホガラノハラカラ

mf

シロキツバサニずテカゼカヲルル
たちてニうごかずかぜかを
ホホニフキキテカゼカヲ

mp

1.2.

3.

三、風薫る

一、鳥の音しげき山あひの
青葉・若葉に、日の光り、
丘の麥畑　飛ぶ蝶の
白き翅に、風薫る。

二、牧場の晝の靜けきに、
群をはなれし若駒は、
雲雀きくとや、眼をとぢて、
立ちて動かず、風薫る。

三、桑の葉滿てて、籠せおひ、
急ぎ　野路を　歸り行く、
歌もほがらの　はらからの
頰に吹來て、風薫る。

野球の歌

♩=104

ピヤノ *f marcato*

一 *f* ヤウ ー クワウ ー ミ ナ ギ ー ル ミ ソ ラ ノ モ ト ー
二 *p* ぢ ん え い し づ け ー き ま な か に た ち ー
三 *mf* ハ ク セ ン エ ガ キ ー テ ネ ツ キ ウ ー ト べ ー
四 *f* しよう ー しや は ほ こ ら ー ず は いしやも く い ー

ニて ー シ ノ ギ ヲ ケ ヅ ー ル ー ヨ
てバ ー し ん ぼう ー め ぐ ー ら ー す
バず ー チ カ ラ ヲ ア ツ ー メ ー シ
ず ー だう ー だう ー あ ら ー そ ー ふ

コウ ー シュ ノ ニ グ ン クワ ン シュウ ー ヒ ト ー シ ー ク
とう ー しゆの む ね は せ い ら ん こ ず ー ゑ ー を
テツ コン イ チ ダ オ ト ア リ コ クウ ー ー ー ヲ
だん じの い き に かつ さ い は わ き ー た ー ち

mf カ タ ヅ ヲ ノ ミ ー テ *f* ア ツ ム ル ヒ
pp さ や か に ふ け ー ど *p* ま ん ぢやう ー こ
p カ ス ム ル タ マ ー ノ *mf* イ サ ヲ モ タ
mf がう ー て き な れ ー ば *f* は な や ぐ ゆふ

(*non dim.*)

ト ー ミ ー ハ トウ ー シュ ニ ダ シヤ ニ
ゑ ー な ー く ふう ー う を ま て り
カ ー シ ー ヤ シュ レ ン ノ カ ヒ ナ
ー ー ひ ー に せ ん し は か へ る

四、野球の歌

一、
陽光みなぎるみ空の下に、
鎬をけづるよ、攻守の二軍。
觀衆ひとしく固唾をのみて、
集むる、瞳は、投手に、打者に。

二、
陣營靜けき眞中に立ちて、
深謀めぐらす、投手の胸は。
青嵐梢をさやかに吹けど、
滿場聲なく風雨を待てり。

三、
白線ゑがきて熱球飛べば、
力を集めし鐵棍一打、
音あり、虛空をかすむる球の
動も高しや、手練の腕。

四、
勝者は誇らず、敗者も悔いず、
堂堂あらそふ男兒の意氣に、
喝采はわきたち、號笛鳴れば、
はなやぐ夕日に、戰士は歸る。

希　望

♩=104　元氣をこめて　*mp*

一　ミ　ヨ　ヤ　ノ　ミ　チ　ノ　ク　ニ　サ　ー　ミ　ヨ　ヤ
二　ミ　ヨ　ヤ　シ　ヅ　カ　ニ　エ　ヲ　ダ　シ　ミ　ヨ　ヤ
三　ミ　ヨ　ヤ　ワ　レ　ラ　ノ　ア　ン　タ　ツ　ミ　ヨ　ヤ
四　み　よ　や　こ　ん　ひ　の　に　ぽ　ぽ　つ　み　よ　や

mf

カ　レ　ー　テ　タ　リ　ト　ミ　エ　ナ　ガ　ラ
さ　び　ー　く　た　ち　し　き　ぎ　に　み　な
ヲ　ー　し　く　ア　レ　ド　ワ　カ　キ　ヒ　ニ
た　サ　ー　く　た　か　く　ひ　の　み　は　た

キ　ノ　フ　ー　モ　ケ　フ　ー　モ　ア　タ　ラ　シ　ク
か　く　れ　し　テ　つ　よ　き　シ　ち　か　ら　も　て
ウ　マ　レ　テ　キ　ニ　は　シ　ビ　ト　ト　シ　テ　テ
か　ざ　し　て　と　は　に　と　つ　く　に　と

mf

メ　ハ　モ　エ　イ　デ　ヌ　ノ　ゾ　ミ　ー　ニ　ー　モ　エ　テ
は　は　の　び　い　で　ぬ　の　ぞ　み　ー　に　ー　も　え　て
ナ　ヲ　ア　ゲ　デ　ヤ　ハ　ノ　ゾ　ミ　ー　ニ　ー　モ　エ　テ
て　を　と　り　ゆ　か　ん　の　ぞ　み　ー　に　ー　も　え　て

f

メ　ハ　モ　エ　イ　デ　ヌ　ノ　ゾ　ミ　ー　ニ　ー　モ　エ　テ
は　は　の　び　い　で　ぬ　の　ぞ　み　ー　に　ー　も　え　て
ナ　ヲ　ア　ゲ　デ　ヤ　ハ　ノ　ゾ　ミ　ー　ニ　ー　モ　エ　テ
て　を　と　り　ゆ　か　ん　の　ぞ　み　ー　に　ー　も　え　て

五、希望

一、見よや、
野路の草に　見よや。
枯れはてたりと見えながら、
昨日も、今日も、新しく
芽は　萌出でぬ、
望に燃えて。
芽は　萌出でぬ、
望に燃えて。

二、見よや、
靜かに、枝を　見よや。
さびしく立ちし木木に、みな、
かくれし強き力もて
葉は　伸出でぬ、
望に燃えて。
葉は　伸出でぬ、
望に燃えて。

三、見よや、
我等の明日を　見よや。
をさなくあれど、若き日に
生まれて來にし人として、
名を　あげでやは、
望に燃えて。
名を　あげでやは、
望に燃えて。

四、見よや、
來ん日の日本　見よや。
正しく、高く、日の御旗
かざして、永久に　外つ國と
手を　とり行かん、
望に燃えて。
手を　とり行かん、
望に燃えて。

梅雨晴

♩= 84

p

一 ヤネニ スズメノ イクニチ ブリーニ
二 よくも つづきし つゆけさ はれーて

mp　mf

アサヒヲ マチテ タカラニ ナケバ
しめりも きよき よあけの にはに

p

ニハノ アヲバヲ フキクルの カゼノを
こぼれ こぼれし ざくろの はなを

mp　mf

キヨキヲ ホメテ マドアケ ハナチて
はきすて かねて てにとり あげて

f

アヒ ヲト キツ ソフ ラタ ミツ ルは スス ガチ ガら シひ サみ ヨる

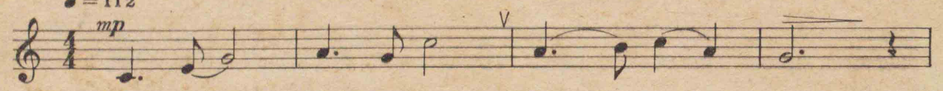
六、梅雨晴

一、屋根に、
雀の　幾日ぶりに
朝日を待ちて高らになけば、
庭の青葉を　吹來る風の
清きをほめて、
窓　あけはなち、
青き空見る、清清しさよ。

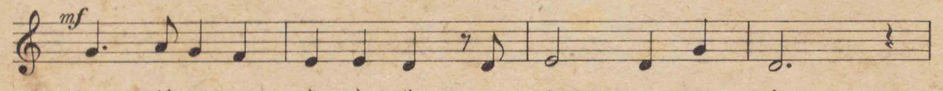
二、よくも
つづきし　梅雨今朝はれて、
しめりも清き　夜明の庭に、
こぼれこぼれし柘榴の花を
掃きすてかねて、
手に　とりあげて、
一つ二つは、土拂ひ見る。

太　平　洋

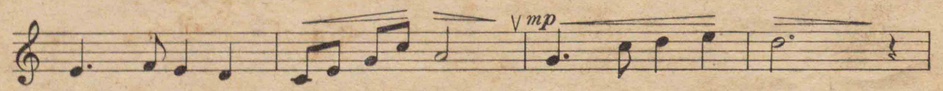
♩=112



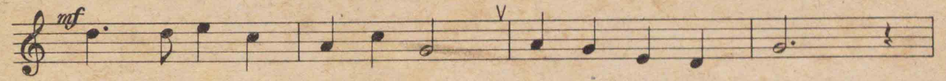
一　ハ　タウ　ー　セ　ン　リ　ヤウ　ーヤウ　ー　ト
二　ど　たう　ー　ば　ん　り　べう　ーべう　ー　と



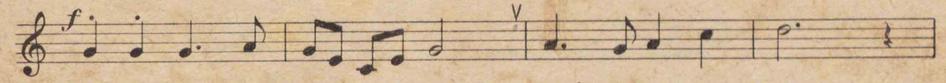
ヒ　ガシ　ニ　ウ　ネ　リ　ニ　シ　ニ　ヨ　セ
み　な　み　に　は　し　り　き　た　に　さ　り



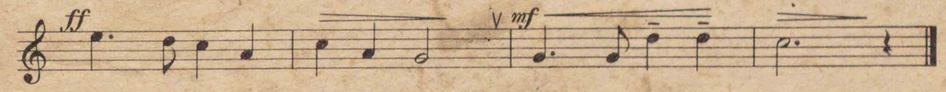
ヒ　イ　ヅ　ル　ク　ー　ニ　ー　ノ　ア　カ　ツ　キ　ニ
ひ　い　づ　る　く　ー　に　ー　の　し　ま　か　げ　に



ヲ　ヲ　シ　ク　ウ　タ　フ　ウ　ミ　ノ　ウ　タ
ほ　が　ら　に　う　た　ふ　う　み　の　う　た



ク　ロ　シ　ホ　コ　ー　エ　ー　テ　イ　ザ　ユ　カ　ン
な　み　の　り　こ　ー　え　ー　て　い　ざ　ゆ　か　ん



ワ　レ　ラ　ノ　ウ　ミ　ヨ　タ　イ　ヘ　イ　ヤ　ウ
わ　れ　ら　の　う　み　よ　た　い　へ　い　や　う

七、太平洋

一、

波濤　千里、　洋洋と
東にうねり、　西に寄せ、
日出づる國の　曉に、
雄雄しく歌ふ、　海の歌。
黑潮こえて　いざ行かん、
我等の海よ、　太平洋。

二、

怒濤　萬里、　渺渺と
南に走り、　北に去り、
日出づる國の　島陰に、
ほがらに歌ふ　海の歌。
波乘りこえて　いざ行かん、
我等の海よ、　太平洋。

登　山

♩=120 行進曲風に

mf

一 マナツナモずヒ
二 あさひまドでずクに
三 タヨルなばレだジけキのマ
四 おはくナンたリユクヨ
五 ヒククナ

マこアめゲフとルざカユりぺむイノもンるノヨめスばヤソざトかマホーツりヤヤ

アこヒいイカツリアどダほトろタキのシりキムとトしカキきノくリサごゴはバコたアきキヤにユそリヲのミひノイなタさウデがカくミテれシをニ

mp

コンガウヅヱモシバシハカタニぢシ
こごしきいはねけはしきさチをかカねロ
スべルナフカキクレバるヒ
かたみにめでテみあぐイト
シマカトミエテメチイ

mf

イクトセクハダテイクトらセネまギシ
おのれのてあしのちかしのキコヱにニ
ハしヤクモオキイデヤサシいひとかシ
しろきはきんぷかびくのリイデ
オモヒモヨラザルカタヨ

f

コナルケーコクコトシワレヨづ
わレたればフぼればむしぷるひするり
オゆヤくこてのイテウーガやカクニアみ
アサヒニラめづらしはンまつのうグ
ムカテトキノコヱア

八、登山

一、眞夏なれども、眞冬の裝、
　曉寒き　小屋を出でて、
　金剛杖も　しばしは　肩に、
　　幾年くはだて、幾年願ぎし
　　これなる峽谷、今年われよづ。

二、朝日まだ出ず、小鳥も目ざめず、
　氷の如き　溪の流
　こごしき岩根、けはしき坂路、
　　おのれの手足の力のままに、
　　渉れば、登れば、武者ぶるひする。

三、たよる　かんじき・アルペンストック、
　一足毎の　歩高し。

滑るな、深きクレバス近し。
　早くも起出で、やさしき聲に、
　　親子の雷鳥　巖角にあり。

四、お花畠の、目ざむるばかりに、
　いろどり　はしく　きそひ咲くを、
　かたみに愛でて　見上ぐる尾根に、
　　白きは　キャンプか、白衣の人か。
　　行手に珍し、偃松の海。

五、低くなりゆく　下界の山山、
　頂ばかり　霧の海に
　島かと見えて、日路いと廣し。
　　思ひもよらざる方より　出でし
　　朝日に向かひて、鬨の聲あぐ。

海國男子

♩=96

ピヤノ ff

一二三四五 アあアあア アあアあア ワわワわワ レれレれレ ラらラらラ ハはハはハ カかカかカ イいイいイ ココココ クくクくク ダだダだダ ンんンんン シしシしシ

サいノあウ ハねミやベ イはゾじラ ヒをハにノ オあカつス ホらケづミ キふルくカ シしウおム マほミほツ グのトうマ ニとホみシ ニもクはク

コゆコほト コめコまミ ロぢロれハ モにニもツ キひイたキ ヨびダかセ クくクきジ オこアにタ ヒもコほイ タりガんヘ チうレかイ テたハいヤウ

ナをナかア ギさミのサ サなノまヒ ノきリすノ スひコらウ ーーーー ナよユをミ ニりルのニ アかオちホ フぢホをヲ ギとフくハ ミりネみレ ルてニしバ

アうカわナ サみガれー ヤゆヤらミ ケくキのハ フわナちホ ーーーガ トざビしラ キをクほニ フまグたマ ジなンかネ ノびカなク ユけンりナ キりキぬリ

九、海國男子

一、ああ、我等は　海國男子。
幸多き　島國に、
心も清く　生ひ立ちて、
渚の砂に　仰ぎ見る
朝燒たふとき　富士の雪。

二、ああ、我等は　海國男子。
岩根を洗ふ　潮の音も、
夢路にひびく　子守歌。
幼き日より　舵とりて、
海行く業を　學びけり。

三、ああ、我等は、海國男子。
望は翔る、海遠く。

心に抱く　あこがれは、
波乘越ゆる　大艦に
輝きなびく　軍艦旗。

四、ああ、我等は　海國男子。
アジヤにつづく　大海は、
譽も高き　日本海。
かの武夫の　血をくみし
我等の血潮　高鳴りぬ。

五、ああ、我等は海國男子。
浦邊の住家　睦ましく、
富は盡きせじ、太平洋。
朝日の海に　帆を張れば、
波はほがらに　招くなり。

一〇、秋近し

一、

庭の垣根に咲きのこる
花の向日葵　いろさめて、
思ひ入るがに　うつむきぬ。
はや秋近し、秋近し。

二、

道のほとりの草むらに、
蟲のはたおり　羽のべて、
機やおるらん、鳴きいでぬ。
はや秋近し、秋近し。

三、

やがて暮れゆく夕空の
星のまたたき　見あぐれば、
光さやかに　ゆらぐなり。
はや秋近し、秋近し。

秋近し

♩=92

一、コラノムゾ　キさー　ニのクユフ　ネりユ　キとレ　カほクノのテハちガ　ニみヤ

二、オはヒルにノ　メべレ　サのグ　ーーー　ロねア　イはミ　リりキ　ハおタ　マたタ　ヒはマノのノ　ナしシ　ハむホ

三、ハはハヌぬリ　キでナ　ムいグ　ツきラ　ウなユ　ニんニ　ガらカ　ルるヤ　イおサヒやリ　モたカ

シしシ　カかカ　チちチ　キきキ　アあア　シしシ　チちチ　キきキ　アあア　ヤやヤ

灯

♩=48

ピヤノ pp

一　タ　カ　イ　ミ　ソ　ラ　ニ　ヒ　ガ　ト　ト　ツ
二　と　ほ　い　み　そ　ら　に　ひ　が　ひ　と　つ
三　ウ　ミ　ノ　ム　カ　フ　ー　ニ　ヒ　ガ　ヒ　ト　ツ

ホ　シ　カ　ト　オ　モ　ヘ　バ　マ　ド　ア　カ　リ
ま　ど　か　と　お　も　へ　ば　お　ほ　し　さ　ま
フ　ネ　カ　ト　オ　モ　ヘ　バ　シ　マ　ノ　ヒ　ダ

二、灯

一、高いみ空に
灯が一つ。
星かと思へば、
窓あかり。

二、遠いみ空に
灯が一つ。
窓かと思へば、
お星さま。

三、海の向かふに
灯が一つ。
船かと思へば、
島の灯だ。

舟にのりて

♩= 120

mf

一 フネニノリテ　カハヲクダル
二 ふねにのりて　うみをわたる

p　mp

ユルキナガレ　キヨキフチセ
かぢはまことただにひとつ

pp　mf

コウヲクグーーリ　キシノクサニ
とほきゆくーーて　なみをけたて

ガケノエダニ　ハナモサキテ
きせんゆけど　かぜにしらほ

p

コトリトビテ　ミネニワクハ
たかくあげて　ひろきなみぢ

mp　p

クモカキリカ　ココロタノーシク
めあてかへず　こころただーしく

mf　f　mf

タダヒタスラニ　カハヲクダルカ
ただましぐらに　うみをわたるう

p　rit.

ハヲクダル　フネニノリテ
みをわたる　ふねにのりて

二、舟にのりて

一、舟にのりて　川を下る。
ゆるき流、清き淵瀨、
小魚くぐり、
岸の草に、崖の枝に、
花も咲きて、小鳥飛びて、
峯にわくは、雲か、霧か。
心樂しく、ただ　ひたすらに
川を下る、川を下る、
舟に　のりて。

二、舟にのりて　海を渡る。
舵は　誠ただに一つ。
遠き行手、
波を蹴たて　汽船ゆけど、
風に　白帆　高くあげて、
廣き波路、目あて　かへず。
心正しく、ただ　ましぐらに
海を渡る、海を渡る、
舟に　のりて。

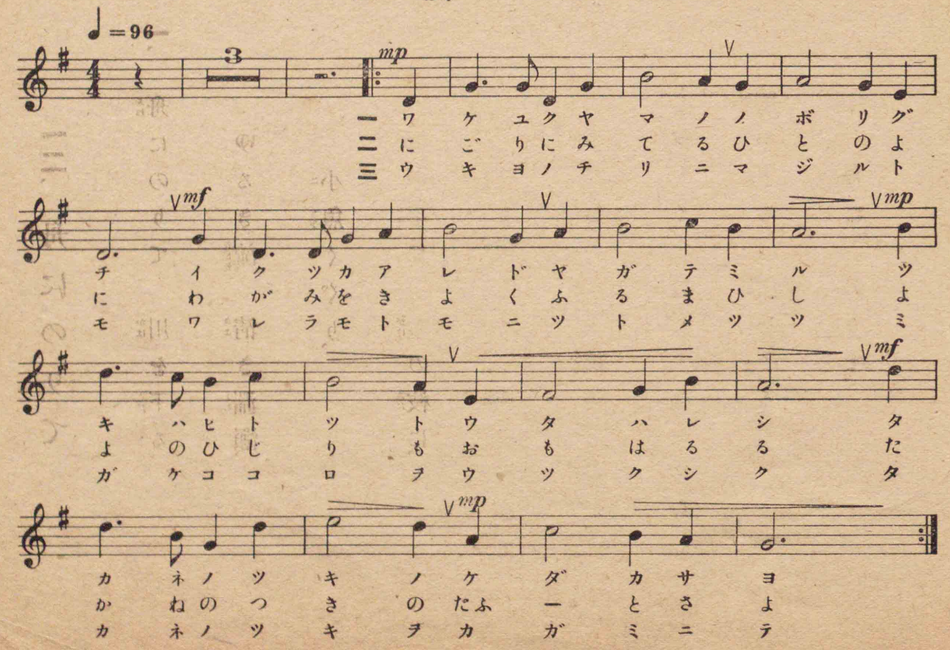
一三、高嶺の月

一、分けゆく山の　登口、
幾つかあれど、やがて見る
月は一つと　うたはれし、
高嶺の月の　けだかさよ。

二、濁に滿てる　人の世に、
わが身を清く　ふるまひし
代代の聖も　おもはるる、
高嶺の月の　たふとさよ。

三、浮世の塵に　まじるとも、
われらも共に　つとめつつ、
磨け、心を、　うつくしく、
高嶺の月を　鏡にて。

高嶺の月



村時雨

♩=92

一 p コノハニクサニサラサラト
二 mp すぎゆくあとをながむれば

スギユクアメヤムラシグレ
こころもいつかあらはれつ

mp ノハラニヤマニムラザトニ
mf のはらもやまもむらざとも

mf ヒハテリナガラツカノマニ p タダサラ
f めざむるばかりつかのまに mp ただすが

1. più p　2. p poco rit. a tempo

サラトソソギユク
すがとなりにけり

一四、村時雨

一、木の葉に、草に、
さらさらと
過ぎゆく雨や、村時雨。
野原に、山に、村里に、
日は照りながら、束の間に、
ただ　さらさらと　そそぎゆく。

二、過ぎゆくあとを
眺むれば、
心も、いつか　洗はれつ。
野原も、山も、村里も、
目ざむるばかり、束の間に、
ただ　すがすがと　なりにけり。

滿洲の野

♩=88

一 ワガイク マンノマー スラヲガ
二 わがいく まんのまー すらをが

セイギノ タメニ タタカヒシ
せいぎの なをぞ とどめたる

イクサノ アトゾ マンシウー ハヒ
いくさの あと のまんしうー はひ

モ アカ アカ トシヅミユク ミ
も ほの ぼの と あけてゆく み

ワタ ー スカナタ ー クワウ ー
わた ー すのべの ー は て

バク トテン ニツラナル チヘイセ
まで も げに や へいわの りさう ー きやう

ン オモヘバ スギシヒゾカナシキ
ー おもへば けふ ー の ひぞうれしき

一五、滿洲の野

一、わが幾萬のますらをが、
正義のために　戰ひし
戰のあとぞ、滿洲は、
陽も　赤赤と沈みゆく。
見渡すかなた、曠漠と
天に連なる　地平線。
思へば、過ぎし
日ぞかなしき。

二、わが幾萬のますらをが、
正義の名をぞ　とどめたる
戰のあとの　滿洲は、
陽も　ほのぼのと明けてゆく。
見渡す野邊の　はてまでも、
實にや、平和の　理想鄕。
思へば、今日の
日ぞうれしき。

御代の榮

（二部合唱）

♩=84

一 クニハ ヒロク トチハ ヒラケテ
二 クリニ ウミニ ソナヘ ナリチ
三 デンウ ト ホキ ホコリ モ

ヒトハ オホクム モノハ ユマタ カリン
サシカ スワカキ ノらニ ハのハ ニもホ

カわノ カれブ ルらル トこチ キこカ ニにラ ウやウ マすチ レくニ アすミ テりリ ヒめテ

ホほホ メめメ ヨよヨ タたタ ヨよヨ ヘへヘ タたタ ミみミ ノのノ ヨよヨ サさサ カかカ ーーー エえエ

一六、御代の榮

一、國はひろく、土地はひらけ、
人は多く、物はゆたか。
かかる時に生まれあひて、
ほめよ、たたへよ、
御代の榮。

二、陸に、海に、そなへ成りて、
さらに進む、空の護。
我等ここに安く住めり。
ほめよ、たたへよ、
御代の榮。

三、傳統遠き誇もちて、
しかも若き國は日本。
伸ぶる力、内に充てり。
ほめよ、たたへよ、
御代の榮。

冬來る

♪ = 132

一 サートノヲガハノイタバーシニー
二 ざふーきばやーしのとりのーぬもー
三 ユフーベハルーケキキタヤーマノー

コノゴロアサゴトシモシゲクーシテ
くもまをもれくるひのひかりーさへ
イタダキシロキハワガシラヌーマニ

ナガレモホソクナリマサリー
さすがにさむきこちしてー
ユキコソハヤモフリニシカー

フユキタルー　フユキタルー
ふゆきたるー　ふゆきたるー
フユキタルー　フユキタルー

一七、冬來る

一、里の小川の板橋に、
此の頃、朝毎、
霜しげくして、
流も細くなりまさり、
冬來る、冬來る。

二、雜木林の鳥の音も、
雲間をもれ來る
日の光さへ、
さすがに寒き心地して、
冬來る、冬來る。

三、夕、遙けき北山の
頂白きは、
我が知らぬ間に
雪こそはやも降りにしか。
冬來る、冬來る。

御裳濯川

♩= 80　敬虔に　*p*

一　アサギヨメ　ミモスソガハニ
二　ふかみどり　こだちがくれに
三　オホヤシマ　クニツハジメノ

mf

カミヂヤマ　カゲヲウツシテ
いやたかく　ちぎにかつをぎ
オホミカミ　イツキマツレル

cresc.

ユクミヅノ　ナガレ
かみがきの　ひろき
カミカゼノ　イセノ

f

カハラズ　スエカケテ　ー
おほまへ　おのづから　ー
ミヤシロ　フリアフギ　ー

dim.　*p*　*poco rit.*

スミヅ　ーマサーレ　ールく
ふして　ーぬかーづ　ーシ
ミルモ　ータフーート　ー

一八、御裳濯川

一、
朝清め　御裳濯川に、
神路山　影を映して、
行く水の　流かはらず、
末かけて　澄みぞまされる。

二、
深みどり　木立がくれに、
いや高く、　千木に鰹木、

神垣の　ひろき大前、
おのづから　伏して額づく。

三、
大八洲　國つはじめの
大神　齋きまつれる、
神風の　伊勢の御社、
ふり仰ぎ　見るもたふとし。

薩摩守

♩= 96

mp

一 エクノ　イグワノノニ　ハルラバこ　ウわサも　ツかラの　ロれスの　へてミふ　バはノの

二 イもヤたみを　ハそカの　ルらバこす、　ウわサも　ツかラの　ロれスの　へてミふ　バはノの

三 ハそカの　ルらバこす、　ウわサも　ツかラの　ロれスの　へてミふ　バはノの

四 かたみを　ルらバこす、　ウわサも　ツかラの　ロれスの　へてミふ　バはノの

mf

クすシな　モゑノは　ホやミせ　クへナん　レしサざ　イほケい　ニのヲの　ムなウこ　ガまムの　ラみ一と　リくリは　テらテに

f

ロさイむ　クだツか　ハめシし　ラのヲな　ノはシが　ユて一ら　メをニの　ヤゆトか　レわメと　ブくドを　ヨれンめ　トとトて。

mp　p

シちンら　ラみモく　アのノざ　ヲたハま　アうヨや　ノしレし　ソなハか　キかアゆ　ハどモも　ブれクれ　サとタま　スさタほ

一九、薩摩守

一、榮華の春も移ろへば、雲北嶺にむらがりて、六波羅の夢破れよと荒ぶは、木曾の青嵐。

二、雲井の空と別れては、末八重潮の浪枕。さだめの果を行くわれと悟れどかなし、歌の道。

三、野山に屍さらす身の、師の御情を蒙りて一首を集にとどめんと、たたくもあはれ、夜半の門。

四、かたみを遺す武士の名は、千載の言の葉に、昔ながらの香を留めて、響もゆかし、山ざくら。

雪の行軍

♩= 100　3　poco rit.　a tempo　mf　(V)

ピヤノ f

一 ア カ ツ キ ノ ソ
二 あ か つ き の そ
三 ア カ ツ キ ノ ソ

V　(V)　V

ラ ー ハ ヒ ロ ク ス エ ケ ブ ル ユ キ ー ノ ノ ハ ラ
ら ー を あ ふ ぎ い さ ま し や ゆ き の か う ー ぐ ん
ラ ー ノ モ ト ニ ウ ツ ク シ ヤ ユ キ ー ノ ノ ヤ マ

mp　(V)　cresc.　V

ヒ ト ツ ラ ニ シ ロ ガ ネ ノ ベ ー テ ア サ ト リ ノ カ
あ さ と で の ち か ら は み ち ー て ふ ゆ の ゐ も ほ
ニ ホ ヒ タ ツ ヤ マ ナ ミ ソ メ ー テ ア サ ヒ コ ノ ヒ

f

ケ ル ミ エ ズ ユ ケ ー ヤ イ ザ ラ ラ ラ ラ ラ ラ
ほ に す ず し う た ー へ い ざ ら ら ら ら ら ら
カ リ ナ ガ ル ト モ ー ヨ イ ザ ラ ラ ラ ラ ラ ラ

ff　(V)

ヒ ト ノ ア ト ナ ー キ ミ チ ー ラ ワ
わ か き わ れ ら ー の こ こ ー ろ を
イ ソ ゲ ワ レ ラ ー ノ ウ サ ー ギ オ

p 輕く

ケ ー ア ユ ミ モ カ ー ロ ー ク
ば ー し ら べ も か ー ろ ー く
フ ー フ モ ト モ チ ー カ ー シ

二〇、雪の行軍

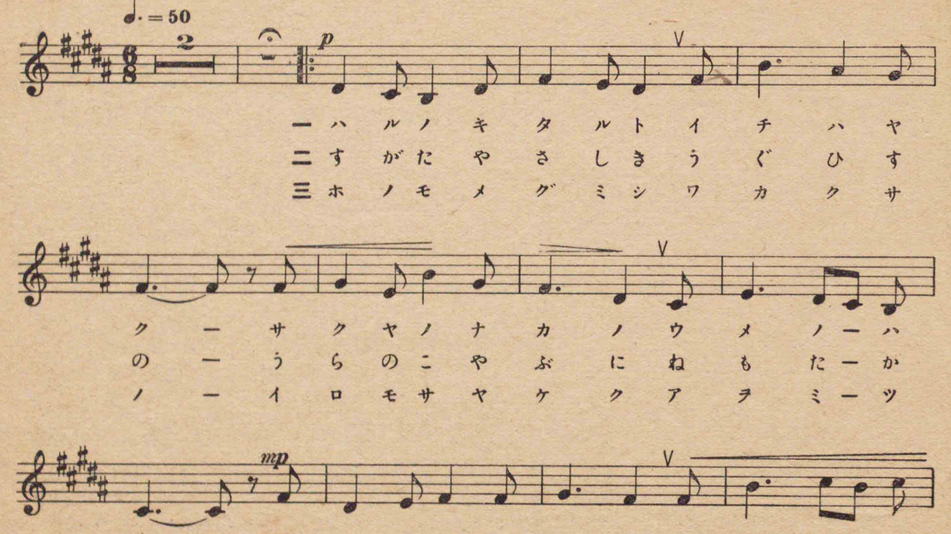
一、曉の
空はひろく、
末煙る　雪の野原。
一面に　銀展べて、
朝鳥の　翔る見えず。
行けや、いざ、ららららら、
人の跡なき道を分け、
歩も輕く。

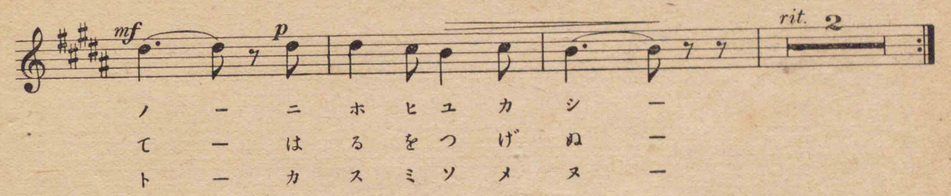
二、曉の
空を仰ぎ、
勇ましや、雪の行軍。

朝戸出の　力は滿ちて、
冬の威も　頰に涼し。
歌へ、いざ、ららららら、
若き　われらのこころをば、
調も輕く。

三、曉の
空の下に、
うつくしや、雪の野山。
にほひ立つ　山脈染めて、
朝日子の　光流る。
友よ、いざ、ららららら、
急げ、われらの兎追ふ
麓も近し。

春の訪れ





二、春の訪れ

一、春の來るといち早く
咲くや、野中の梅の花。
そよ吹く風も、花の香の
匂ゆかし。

二、すがたやさしき鶯の、
裏の小藪に音も高く、
野山の鳥にさきがけて、
春を告げぬ。

三、ほのも芽ぐみし若草の、
色もさやけく青みつつ、
野原も、山も、うらうらと
霞みそめぬ。

送別の歌

（獨唱及び二部合唱）

♩=69

I

II

ピヤノ ♩=69

mp

一 ユ ク カ ワ ガ ト モ マ ナ ビ ヤ ア ト ニ サ ラ
二 ゆ く か わ が と も ま な び や あ と に さ ら
三 ユ ケ ヤ ワ ガ ト モ マ サ キ ク ア レ ヤ サ レ

一 ユ ク カ ワ ガ ト モ マ ナ ビ ヤ ア ト ニ
二 ゆ く か わ が と も ま な び や あ と に
三 ユ ケ ヤ ワ ガ ト モ マ サ キ ク ア レ ヤ

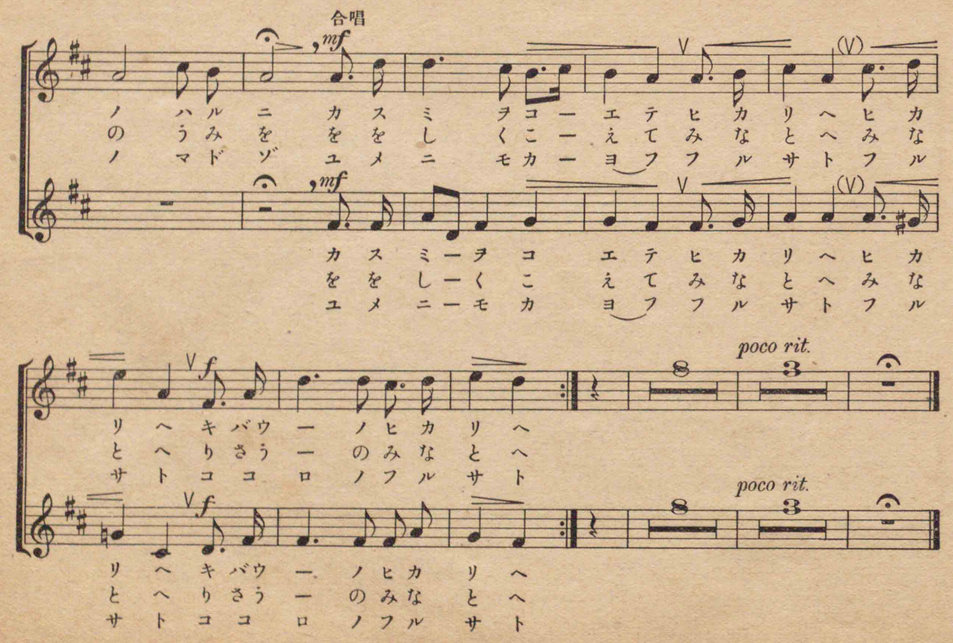
獨唱

p

バ カ ケ レ ヨ コ ト リ ノ ゴ ト ク ノ ヨ
ば こ ぎ で よ ど り よ く の ふ ね を よ
ド オ モ ヘ ヨ イ ヅ ミ ノ ゴ ト ク ソ

サ ラ バ カ ケ レ ヨ コ ト リ ノ ゴ ト ク
さ ら ば こ ぎ で よ ど り よ く の ふ ね を
サ レ ド オ モ ヘ ヨ イ ヅ ミ ノ ゴ ト ク

ハ ミ ド リ ニ モ エ ハ ナ サ キ カ ゼ ニ ホ フ コ
の あ ら し は ほ え き り ま き な み す さ ぶ そ
ノ コ コ ロ ニ ワ ク ツ キ セ ヌ オ モ ヒ デ ノ コ



三、送別の歌

一、行くか、わが友、學舍あとに。
さらば翔れよ、小鳥の如く。
獨唱 野はみどりに萌え、
花咲き、風にほふ　この春に、
霞を越えて　光へ、光へ、希望の光へ。

二、行くか、わが友、學舍あとに。
さらば漕出よ、努力の船を。
獨唱 世の嵐は吼え、
霧卷き、波荒ぶ　その海を、
雄雄しく越えて　港へ、港へ、理想の港へ。

三、行けや、わが友、まさきくあれや。
されど思へよ、泉の如く
獨唱 その心に湧く、
盡きせぬ思出の　この窓ぞ、
夢にも通ふ　故里、故里、こころの故里。

發行所　大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座一丁目五番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者　大橋光吉
東京市小石川區久堅町百八番地

代表者　取締役社長　杉山常次郎
發行者　大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座一丁目五番地

製複許不

著作權者　文部省

昭和十年三月三十一日發行
昭和十年三月二十七日印刷

新訂高等小學唱歌　第一學年男子用　16

定價　金拾貳錢